
静かなる満月の夜に

満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かなる満月の夜に

【Nコード】

N5467N

【作者名】

満月

【あらすじ】

ある男の子の、不思議で、少し切ない夏休みの物語。

プロフィール

僕の名前は望月光。

この名前は自分でも気に入っている。

望月は満月という意味。

下の名前の光、ひかりって読む。

満月の光。

僕はどこにでもいる高校三年生。

部活にも入ってない、アルバイトもしていない。

学生ニートって言うんだっけな。

そんな僕でも、高校3年生の最後の夏。

みんなは大事な時期のため、勉強モード。

それに対し僕は、進路など決まっていなため

勉強するわけでもなく、ただのんびりと毎日を過ごしているだけ。

僕の日課は夜の散歩。

いつも寄る公園は僕のお気に入りのスポットだ。

この公園は、夕方まで子供がたくさんいるため

その時間帯はいつもにぎやかだ。

子供の笑い声、父兄の世間話。

僕にとっては耳障り。

僕は静かなほうが好きだから、ひとりでいるのが好きだから
だから僕はいつも夜に散歩をする。

夜の公園はいい。

春になると木のざわめきが。

夏になると虫の鳴き声が。

秋になると紅葉が電灯で淡く美しく。

冬になると雪が振り、さらに沈黙に。

この物語は、

高校最後の夏休みに起こった、切なく、心温まるお話・・・

夏休み、出会い。

「・・・で、あるからにして、みんなこの夏休みを大事に使い、自分の未来のために頑張りなさい。」

担任の長い話が終わり、僕たちは明日から夏休みに入る。

僕以外のみんなは高校三年生ということもあり

塾の夏期講習や最後の大会に向けての部活の練習など

自分のためになることを始めている。

ただ一人、例外を覗いては。

「おーっ、光！夏休み何するの？」

こいつの名前は黒谷匠。

僕が唯一この学校で話す友達。

親友と言っても過言ではないかもしれない。

僕はそれなりに匠のことを信頼してるし

これからも仲良くしたいと思っている。

一人が好きな僕にしては、こういうこと言うのは珍しい。

「僕は適当に、色んな所に散歩とかかな。」

僕には趣味というものが無い。

つまらない人間かと思うかもしれないけど

案外そういうのもいいと思ってしまう。

「光はホントに変わってるな。健全な男子高校生だったら

彼女のひとりやふたり作って、夏と一緒に海行ったりしたいだろ

」。

「あいにく僕はそういうの興味ないからね。」

「まったくつれないなー。ま、夏休みにどこか二人で行こうぜ。同じ独り身同志。」

「そうだね。それじゃ、また。」

僕は適当に流すことにする。

学校から帰宅して、とりあえず僕は本を読むことにする。どこにいくわけでもなく、何をするわけでもない。

時間潰しにはもってこいだ。

ついでに今呼んでいる小説は、僕が好きな作者の乙一さんの本。この人の作品は、毎回毎回とても深い話で感動する。

5

家に一人でいる時間も好きだ。

親は共働き夜まで帰ってこないし、兄弟もない。

だから、それまで一人。

ずっと本を読んでいるんだけど、それでも僕はいい。

誰にもこの時間を邪魔されず

自分の世界に入り込めるから。

辺りが暗くなつてき始めた頃、親が帰ってきた。

大体先に帰ってくるのは母親だ。

父親は普通のサラリーマン。

母親は普通のパートのおばさん。

なんの変哲もない家庭。

お金持ちでもなく、貧乏でもない。

ただ、二人とも僕に似ているから
この空いてる時間を無駄には使いたくないらしい。
だから働くのも自分のため。
この二人を見ていたから、僕はこういう風に育ったんだな。と
ひとりでしみじみと思う。

夜の10時、父親も帰ってきて晩飯に。
少し遅いけど、動いていない僕には丁度いい時間だ。
ご飯を食べ終わり、僕はお風呂に入る。
そしてお風呂から出たら、散歩に行く。
これが僕の日課だ。

いつも通り、1時間ほどの散歩に行つてくると
親に伝えて、出かけることに。

外にでると、夏とは思えないほどの涼しい風だった。
お風呂上がりのためかとても気持ちいい。
適当に家の周りをブラブラする。
最後にいつも寄る誰もいない公園へ。

だけど今日だけは違った。
いつもは人のいる時間ではないのに、女の子がいる。
僕と同じくらいの子。

その日は満月だった。

満月の夜に

僕はその光景を、ただただずっと見ていた。
変な顔だったかもしれないけど、その時はどうでもよかった。

．．．満月の灯りに照らされ、それを見つめる少女。
写真を撮って、どこかのコンクールに応募すれば
間違いなく金賞は取れるだろう。
それほど、この光景は美しかった。
そして、どこか悲しかった。

あれ？
なんで僕は悲しいと思った？

ああ、そうか。
彼女の瞳から大きな水滴が流れているからだ。

僕はそれからその女の子のことを見ていた。
初めて見つけたときから何十分、何時間経っただろうか。

実際はほんの数秒しか見てないと思うけど
なぜか時間が止まっていたような気がしたんだ。

彼女は僕の方をみようとはしない。
いや、気づいていないだけかもしれない。

ベンチに座って、ずっと満月を見ているから
僕のことなんか見えなくても不自然ではない。

なぜか僕はそのベンチに座ることにした。
それから30分くらい、僕と彼女は満月を見ていた。
彼女の側にいると、なぜか落ち着けた。
いつもなら、車が何台か通り、その音が耳に入ってくるはずなのに
その子の横だと、なにも聞こえなかった。
聞こえるのは風の音だけ。

その空間が、僕は好きになってしまった。
空間ではなく、その女の子のこともかもしれない。
まだ、それはわからない。

それからさらに時間が経過する。
あれから何分経ったかな？
僕はそろそろ帰ろうと思い、席を立つ。
そしたら、少女が初めて口を開いた。

「あなたはこの光が好き？ 私は大好き。この光は私の心を落ち着か
せてくれる。」

この風も、風の匂いも、全てが私を包んでくれる。
月の光に当たると体が暖かくなるし、とても気分が良くなる。」

その少女の声は、とても綺麗だった。
どんなにすごいオーケストラでも、どんなに高価で希少な楽器だっ
たとしても

その声には負けてしまっただろう。
透き通るような声。
風の声。
そんな感じがした。

「僕も好き。とても落ち着くし。僕のお気に入りの場所。」

「そう、そんな場所に私はいて平気？ここにいていい？」

「うん、君はこの場所にピッタリだ。僕なんかよりも、きっといい。」

「でも、一人は寂しいものね。だから時々こうして、一緒にお月様を眺めてくれない？」

「もちろん、そうでなくてもこの場所は好きだしね。」

「それじゃあ、自己紹介するよ。僕の名前は光。望月光。」

「私の名前は奏。よろしくね光。」

そうして僕は家に帰る。

なんだか不思議だった。

あの子はなんで泣いてたのだろう。

なんでひとりでいるのだろう。

だけど、それは聞けなかった。

聞かないで。と言われてる気がした。

明日、またこの時間にいくことにしよう。

こうして、僕の夏休み初日が終わる。

また、逢えるかなって思いながら。

彼女との日々

彼女と会った次の日。

僕はいつも通り、少し早い時間で目が覚めてしまう。

まだ朝の五時。

しかし外では小鳥が泣いている。

昨日は、少し遅く帰ってきたためまだ少し眠い。

僕は洗面所に移動する。

両親はまだ起きていないため、静かだ。

いつもの習慣で歯を磨き、顔を洗う。

まだ時間が早い為、僕は部屋に戻って本を読むことにした。

そろそろ、親が起き始める時間だ。

ガチャ

起きてきた。

多分母親かな。

朝食をつくるため、少し父親よりいつも早く起きる。

朝食ができるまで、まだ僕は本を読むことにしよう。

少ししてから、僕を呼ぶ声がある。

「光、ごはんよ。」

母親だ。

リビングに行ったら、父親も起きていて、もう朝食をとっていた。

朝食が終わり、両親は仕事に出かける。
僕は夏休みのため、学校もなにもない。

そのため親は今日の食事代を置いていってくれた。

「いつてくる。」

そうして二人は出て行った。

僕は昼の時間までまだ本を読むことにした。

部屋はクーラーで涼しい。

外の音も少なく、時計とクーラーの音くらいしかしない。

気づいたら、もうお昼だった。

さっき朝食食べたばかりなのに。と思ったが
どうやら体は正直で、腹の虫がなっている。

冷蔵庫の中身を見たが、僕はそこまで料理は上手くない。
むしろ下手だ。

食材を台無しにしてしまう。

「何もないのか……。気分転換に外食でもしようかな。」

親からもらったお金を持って、外にでる。

近くのコンビニもあるが、やはりたまにはファミレスとかに行きたくなる。

僕は商店街にある、いささか有名なファーストフード店に入ることにした。

「．．．あ。」

「あれ！光じゃん！」

匠だった。

見るところ、女の子2、3人と一緒のようだ。

僕は挨拶をかわし、一人席に行く。

いや、行こうとした。

「まてまてまて！一緒に食べるだろそこは！」

「邪魔しちゃ悪いから僕はひとりで食べるよ。」

「まーたひとりかよー。たまにはいいじゃん！な？」

「そこまでいうなら。だけど食べたらずぐ帰るよ、僕は。」

結局一緒に食べることになった。

女の子達は、少し派手め。

可愛いとは思うものの、そういう対象ではない。あまり僕にはそういう感情は持ち合わせないし。

僕をよそに、女の子や匠は話し始める。

匠は、僕がにぎやかなのが好きじゃないのを知ってるため無理に話題を振ってこない。

正直助かる。

「あのー、なんで、えーと・・・」

「光、望月光。」

「光君は何も話さないの？」

「あ、こいつは結構人見知りなんだよ！緊張してるだけだから。」

さすが匠、ナイスフォロー。

一人が好きなんだ、と言ったらなんて反応をするだろうか。変わってるとか、いわれるのかな。

まあ、それはそれでいいけど。

他人になんて言われようが僕は気にしないし。

そうこうしている内に、みんな昼食を食べ終わっていた。

僕はお金を置いて、帰ろうとする。

「あ、光。ちょっとトイレ行こうぜ。」

匠がそう言ってくる。

なにかあるな、と思い

一緒にいくことした。

「悪いな、無理に誘っちゃって。あいつらと別れたらまたメールするわ。後で合流できたらしよう。」

「別に気にしなくていいよ。たまには悪くないっていうのは間違っ
てないし。」

そのまま僕はその店から出ることにした。

「さて、どうしようかな。」
とりあえず本屋に入ってみることにする。

一冊だけ、気になる本を買って帰ることにする。
なんだかんだでもう7時くらい。
いくつかある本屋に行ってたから、結構時間がかかってしまった。

家に帰り、買ったばかりの本を読むことに。
気づいたらもう夜だ。
本は時間を忘れさせてくれる。

親が帰ってきた。

僕は先にお風呂にはいることした。
早く彼女に逢いたいって思ってた。

夕飯を食べ終わり、僕はすぐに外に散歩しに行く。

今日も満月。

きつと彼女はいるだろう。
不思議だけどそんな感じがした。
いつも歩く散歩コースではなく、僕は一直線に
あの公園に向かうことにする。
逢いたい気持ちがすぐに分かる。

「・・・逢いたい？なんで僕はそんなこと思っているのだろうか。」
彼女のことを僕は何も知らないのに。
逆に、何も知らないからこそひかれるものがあるのだろうか。

僕って単純だな。

「・・・いた。」

彼女は昨日と同じように、月を見ていた。

昨日見たばかりの光景。

しかし今日は違ってた。

昨日、彼女を泣いていた。

しかし今日は泣いていない。

しかもどこか嬉しそうな顔。

笑っているわけでもないけど、不思議とそう思ってしまった。

「今日も、来てたんだね。」

「私もここ、好きになったんだもの。」

「そっか、また満月だ。」

「そうね。綺麗。」

そして僕らはまた月を見る。

話している時間より、月を見ている時間のほうが長いなんて
なんか笑えるな。

でも、落ち着く。

彼女といると、まんざら夏休みも悪くないと思える。
むしろ、ずっと夏休みでもいいと思ってしまう。

これは恋なのかな？
それとも僕の勘違い？

そんなことを思っていたら、彼女が口を開く。

「私、あまり人と話さないから、友達がいないの。」

「僕も話さない。おかげで友達も一人くらいしかいないよ。」

「だから、私と友達になつてほしい。」

「こうして一緒に話したり、月を見ていてほしい。」

「僕も思ってた。君ともっと話がしたい。だからこちらからもお願いをするよ。」

「ありがとう、光。」

「ううん、こちらこそ。」

少ししか話してないけど、僕は満足だった。

彼女と友達になれたから。

彼女と別れ、僕は帰る。

別れるとき、

「また明日。」と言われて、少し胸がくすぐったい。
笑みがほんの少し、もれてしまう。

家に帰り、寝ることにした。

「・・・また明日、か・・・。」

それから、僕は毎日のようにその公園に行った。
彼女に逢うために。

ただ、彼女と一緒にいたい。
それだけを思っで。

それからというものの、いつも夜に公園にいき
彼女と話していた。

いつのまにか、彼女のことを気になっていた。
これが恋なのかは分からない。
だけど、他の女の子には絶対にならない気持ち。
この夏が、終わらないことを願ってた。

毎日毎日、彼女と逢っていたけど、いつも会話は少ない。
だけどそれでもよかった。
それだけで良かった。

幸せだったから。

もうすぐ、夏が終わる。

僕の気持ち

今日も僕は早く起きた。

いつも通り、小鳥が鳴いている。

起きて、すぐに僕は匠に電話をする。

「トゥルルルル．．．トゥルルルル．．．トゥルもしも．．．し」

「光です。今日少しだけ付き合ってもらいたい。12時に商店街で
ブチッ」

ちよつと強引かな．．．。

少し後悔したけど、この間付き合わされたからいいか。

今日の予定はすでに決めていた。

洋服を買いに行く。

高1・2のころは、本欲しさのためにバイトをしていた時期があっ
た。

でも、バイトをしてるとそついう暇がなくなるため
結局貯まる一方になった。

バイトをやめてからは、本を読む時間が増えたけど
月に4、5冊くらいしか読んでない。

ようやく、使い道ができた。

12時、意外にピツタシに待ち合わせ場所にいた匠に驚いた。

「なんでいるの?」

「光．．．お前が呼んだんだろ．．．。」

「いや、そうだけど。まさか時間ピツタシにいるとは思わなかった。

」

「あの光が自分から俺を誘うなんて奇跡、なかなか起こらないだろ?」

「よっぽど大切なことかもしれないと思って、一生懸命来てやったのに。」

「悪かったね。さて、じゃあ行こうか。」

「え?どこにだよ?」

「洋服買いに。」

「お、お前からそんなセリフが聞けるとは思わなかったよ．．．。」

「僕も一生言わないと思ってたけど、色々あってね。」

「匠はオシャレだから、こういうの分かるって思ってたさ。それに友達匠くらいしかいないし。」

正直、僕の私服は格好悪い。

オシャレとは程遠い。

最初はこのままでいいと思ってたけど、段々と恥ずかしくなってきた。

多分、僕はあの女の子のことが気になってるんだろう。

「ま、とうとうお前にもかって感じだな。よし！親友の俺がお前をかつこよくしてやる。」

「とりあえず．．．上から下まで揃えるか．．．。」

上下を見ながら匠は言う。

そんなにかっこ悪いのかな、僕。

色々な場所へ行った。

渋谷や池袋、上野。

匠がいつも洋服を買いに行くお気に入りの場所。

匠は安くて、品揃えの良い店もよく知っていた。

これほどこいつがたくましいと思えたことはない。

「ほんとに、お前がいて良かったよ。」

「照れくせーな。やめるよ、友達じゃなか。」

「さて、じゃあ最後の店いくか。ここはとっておき。」

そいつって匠は僕を裏の路地へ連れて行った。

歩くこと20分。

「匠、その場所っていつごろつくの？もう結構歩いたし、人の気配も全然ないよ。」

「いーんだよ。だからとっておきの場所なんだからな。」

「ほら、着いたぞ。」

「.....」

思わず言葉を失ってしまった。

お世辞でも綺麗とは言えない、小さなお店。

看板で、「月明かりのお店」としか書いていない、あやしそうな店。

「こんな店に、洋服なんか売ってるの？」

「ばーか、ここは洋服じゃねーよ。アクセサリ専門店。」

「アクセサリなんか付けないよ、僕。」

「別にそれでもいいけどさ。プレゼントしてみるよ、きっと喜ぶぜ？」

「え？」

「女の子だろ？」

「大体男ってのは、好きな子ができたら、自分を格好良くしたいものだ。」

「なんでもお見通し、か。」

匠は鋭い。

僕が単純なだけだろうか。

でも、好きな子...か。

やっぱり僕はあの子のことが好きなんだろうか。

これが恋っていうものなんだろうか。

「さて、さっさと入るぞ。」

そういつてひとりでその店に入ろうとしてたから、僕は急いで付いてった。

中に入ってみると、店の外見とは裏腹にすごい品揃え。

しかもどれも見たこと無いような、珍しいアクセサリーばかり。

指輪、ブレスレット、ネックレス・・・その他色々。

「こんなにいっぱいあるんだ。」

「だろ？とっておきの意味が分かるだろ？しかも値段も出来のわりに安いし。」

「この店はすべて手作りなんだぜ。」

「へー。」

「なにか、捜し物ですか？」

「どういう物かお決まりでしたら、案内致しますよ。」

若い男の人が出てきた。

多分店員だろうか。

「この店の創設者。まあ、一人だけなんだけどね。若そうにみえて、30らしい。」

「・・・え。」

どうやら店長らしい。

ほんとに見た目は若い。

大学生って言っても、怪しまれないだろう・・・。

「それで、なにかお探しですか？」

「女の子に・・・渡したいんですけど・・・。なにかオススメの
かありますか？」

「オススメ、ですか。申し訳ありませんが、それはありません。」

「なんでですか？」

「あなたがその子にプレゼントしたいのなら、あなたがホントにそ
の子のことが好きなら

自分で探して、自分がいいと思うものを買っていつてください。」

「そうすればその子もきっと喜びます。」

たしかにそうだった。

店員オススメのものを買って、それを渡したところで
きっと彼女は喜ばない。

彼女じゃなくても、きっとみんな喜ばない。

「分かりました。それじゃあ、ネックレスはどこにありますか？」

「左のケースの中に入っています。もし気になったら、ケースから
出しますのでお呼びください。」

「はい、ありがとうございます。」

僕達はそのネックレスがはいってる、ケースのところまで移動した。
大体30種類くらいだろうか。

一つ一つ、見ていたけど、どうもいいのがない。
いや、どれもとても綺麗なデザインで
魅力的なのだが、どうも彼女と合わない気がした。

「あ。」

棚の一番端の方に、なにかの花のネックレスがあった。

「すみません。この花の名前ってなんですか？」

「この花はアネモネ、という花です。花言葉は真実。」

その花の形をしたネックレスに僕は惹かれていた。
変わった感じの花。
色は白と黒。

彼女にピッタシの色だ。

「これでお願いします。」

「分かりました。」

会計をすませ、僕は帰ることにした。
僕は、胸がなぜかドキドキしていた。
早く渡したい。
逢いたい。

駅前に着き、僕達は解散することに。

「匠。」

「ん？」

「今日はありがとう。楽しかった。」

「ああ、俺もだ。頑張れよ、お前だったら絶対に大丈夫。」

「うん」

もう夕飯の時間だ。

両手に洋服や靴などの袋を持って、僕は家に帰った。

親には珍しそうな顔をされたが、なにかが分かったらしくニコツつと笑って、それからはいつも通りだ。

僕はお風呂に入り、今日買ったばかりの洋服を着た。鏡をみると、まるで自分ではない気がした。

「やっぱり、匠に言って正解だったかな。」

匠にワックスの使い方や、洋服の着こなし方を教えてもらい、そして自信を貰った。

ネックレスを持ち、あの子がいる公園に行くことにした。

途中、なんだか怖い気がした。

もし、僕があの子に気持ちを伝えたらなにかが終わる気がした。

フラれるとか、そういうものじゃない。

もう、一生逢えなくなる。

そんな予感がしていた。

公園に着いた。

僕の鼓動が脈をうっていた。

ドクンドクンいってるのが分かる。

一番はじめに会ったベンチに

今日も彼女は座っていた。

夏休み、最終日。

月明かりの少女

いつものように僕らは同じベンチに座る。
そして月を見る。

初めて出会ったときのようなお月様だ。
真ん丸で、綺麗な光を放っていた。

「今日で、夏休みが終わるのね。」

口を開いたのは奏だった。

「そうだね、あつという間だった。それに楽しかった。」

「私も楽しかった。光と一緒にいてくれたおかげで、私は幸せだった。」

「僕も、幸せだった。」

「奏。」

奏が僕を見る。

どこか不思議な雰囲気をした女の子。
とても綺麗で、どこか悲しそうな彼女。
そんな子に僕は恋をしていた。

「これ、僕からのお礼。」

僕は今日買ったネックレスを出した。

「これを、私に？」

「うん、そのために買ってきた。」

「この花はアネモネ。真実って意味らしい。」

「着けて、くれるかな？」

「うん」

僕は奏の首に手を回し、ネックレスをつけた。

「良かった、サイズはピッタシだ。」

「光．．．ほんとにありがとう。この一ヶ月、私は幸せだった。」

「光のおかげで、最後にいい思い出ができた。」

「ほんとに．．．ほんとにありがとう．．．。」

「最後じゃないよ、これからも僕達は、こうやって一緒に月を見る。」

「夏が終わっても、秋になっても、冬になっても。これからもずっとだ。」

「僕は．．．奏のことが好きなんだ！」

「．．．私も光のことが大好き。」

「だけど、私はもうこの世の人ではないの。」

「どづいうことだよ！奏！」

「私はもう、死んでいるの。交通事故で。」

「なにも思い出のないまま、死んでしまったの。」

「なにかしたい、なんでもいい。自分が生きてたつていう証が欲しくて、私はこの世にいた。」

「だけど、もうそれも今日で終わり。」

「光。光が私が生きてたつていう証を覚えてくれた。思い出をくれた。」

「だから私、もういなくなっちゃ。」

「そんなの．．．やだ！行くな！行くなよ．．．奏．．．。」

奏の足元が、光の粒となつて消えいく。

「ありがとう．．．。大好きだよ。光。」

「僕もだ、奏！だからお願いだ！いかないでくれ！俺を一人にしないでくれ！！」

奏の体は、もう胸までできていた。

「ネックレス、ありがとう。一生、大切に作るからね。」

「光のことも、絶対に忘れない。私の好きな人。」

「私の思い出。」

「奏．．．僕も奏のことを忘れない。奏が生きてた証を、僕は忘れない！！」

「また、逢えるよね。絶対に、逢えるよね？」

「また、逢えるよ。そしたらまた、一緒に月を見ようね光。」

「ああ！絶対だ！！」

「ありがとう、好きだよ、光。」

「それじゃあ．．．また明日な、奏．．．!!」

「うん、また明日．．．。」

「さよなら、光。」

すべてが光の粒となって無くなった。

奏が、僕が、この公園が、全てが僕の思い出。

大好きだった日々、これからも一生忘れないでいこう。

アネモネの花言葉は真実。

もうひとつは、恋の苦しみ。

僕は苦しくない。

だって、奏がいたから。

僕は夜空を見上げる。

今日も、満月だ。

月明かりの少女（後書き）

最初で最後の作品になるかな。

あんまりうまくは書けなかったけど

僕にとっては、最高の作品になったと思う。

ただの自己満だと思いますが。

こんな作品でも、見てくれる人がいるなら

僕は嬉しいです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5467n/>

静かなる満月の夜に

2010年10月9日10時17分発行